

中国語教育における「表現法」－『表現法マニュアル』を中心に

山内 智恵美

The complex mechanisms of phrase patterns in Chinese language

YAMAUCHI Chiemi

Abstract: We published two Chinese language research books, one in 2005 and one in 2009, with Surugadai Press. These books concentrated on phrase patterns because they are so useful for studying Chinese. In addition, the rules of grammar do not establish all the phrase patterns; rather, they are established more by usage than by rules. I hope that by using these books, students of Chinese will come to understand the complex mechanisms of phrase patterns.

はじめに

十数年来の大学での中国語の指導、特に中国語を専門に学習する学生を指導するなかで、中級レベルに達した学生（中国語検定試験3級合格者レベル）が次のステップへ進むとき、また上級レベルに達した学生（中国語検定試験2級合格者レベル）が、さらにその上のレベルに進むときに、学生たちが超えがたい壁にぶつかる姿を目にし、その背景や原因を探求し、学生たちがこの壁を乗り越える手助けとなればと考えるようになった。こうした学生たちの抱えている問題の原因や背景を考える中で、中級レベルの学生と上級レベルの学生の問題点は異質のものであることに気付くと同時に、上級レベル者には、系統的に中国語を理解する手助けとなる参考書が必要であることを痛感した。

中国語を系統的に整理した参考書という視点に立つとき、現存する中国語参考書については、文法を中心に整理したもの、語彙を中心に整理したものなど、多くの研究者の手によるすぐれた参考書が存在するが、本来、中国語が文法による系統化の歴史が浅く、また文法上脆弱な言語体系からなる言語であるため、文法中心の参考書の使用では、指導の効果を検証する中で、期待するような効果をあげることが難しかった。そのような中で、豊かな表現形式を持つ中国語ならではの特徴を鑑み、「表現法」による『中国語表現法マニュアル』（初・中級）を2005年5月に出版し、その後『続・中国語表現法マニュアル』（中・上級）を2010年2月に出版した。これらの参考書は、これまでの中国語参考書の中ではあまり用いられていない「表現法」に基づく分類や系統立てを行ったものであるが、「表現法」自体が「修辭法」などと混同されることも多く、これらの参考書の中で用いた「表現法」自体がどのようなものであるかが、あまり理解されていない。また、外国語教育全体の中で、また中国語学界の中で、「表現法」がどのような位置にあるかもあまり理解されていない。

よって、本稿では、2冊の『中国語表現法マニュアル』で用いた「表現法」とはいかなるものかを解説するとともに、「表現法」を用いた『中国語表現法マニュアル』の特徴や構成などを明らかにする。また、同時に系統的な中国語学習に「表現法」の活用がどのような効果を挙げることができるかについても言及する。

I 表現法とは

これまでの中国語の参考書は、語彙の用例や用法を中心にまとめたもの¹、文法を中心にまとめたものが主流であり²、これは、他の外国語参考書の現状と一致する。その理由は幾つか存在するが、その一つは、参考書を作成する上で想定されているのが、日本国内において、中国語を学習する対象者を想定して参考書や研究書が作成されるためである。つまり、中国語学習において、日本語という媒介言語を使い、中国語を説明、解説する指導環境を前提としているためである。これは、日本における他の外国語教育においても同様である³。

言語教育は一方では、リスニング力の養成や会話の重要性が叫ばれ、言語教育において「会話中心主義」ともとられる習得言語による教育も進んでいる。それと同時に、ネイティブの教師の重要性も語られているが、多くはリスニング力の向上や会話力の向上を目指したものであり、習得言語を系統的また相対的に理解するためのものに活用されるものではない。

一方、中国語を文法から整理することは、中国語が文法上脆弱な一面を持つ言語であるため、ある程度の制限と困難がともなう。例えば、中国語を品詞分類することは、多くのあいまいな部分が存在する。つまり、中国語の単語には、接尾語や接頭語の変化がなく、また、品詞による表記変化がないため、文字の表面上の姿だけで品詞を判断することができない。その原因は、中国語の文字である漢字の形成には、品詞の概念が、作成時にはまったく考えられていないからである。文法上脆弱な面を持つ中国語であるが、逆に、豊かな表現形式を持つ言語であることは、多くの研究者も認めるところである。表現法は、この豊かな表現形式に注目したものである。

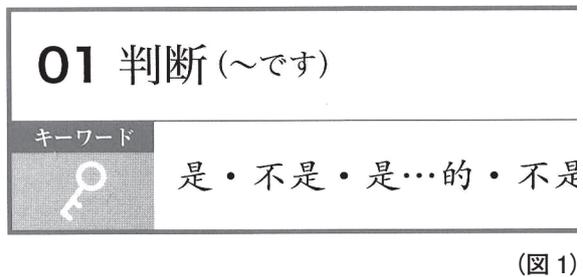
表現法の着眼点は、日本における外国人への日本語教育にある。日本語教育は、母語が異なる外国人に日本語を教育しなければならない現状から、「直接法」や「間接法」といった教授法が確立し⁴、媒介言語を伴わない「直接法」には、場面を活かした教授法、表現パターンの相互認識、文型などに関する教授法への研究や取り組みがさかんである。また、日本語が「はっきり自己主張せず、言動を曖昧にして、自分だけが異なる思想・意見をもつことを避けようとすることが多い⁵」一面を持つため、多くの意図を内在する表現によっては、話者の意図が的確に相手に伝わらない面も持つ。よって、表現パターンを整理した上で、同一表現（同じような意思を伝えようとする表現方法）によって日本語を分類しようとする試みも進んでいる。例えば『日本語表現文型』は、「集められた膨大な用例資料を分類整理し、各表現形式ごとに解説を加えて成ったもの⁶」であると説明している。また、昨今の方言とは異なる意味で、各世代、各職業、各分野においてのみ常用、または認識される日本語の存在に注目し、帰国子女の言語の適応が如何なるものであるかに着眼的を置き、「日本語表現の内容が今後コミュニケーションの中で、どのように展開されているのかというテーマ⁷」で整理したものに『日本語表現』がある。ここで使われる「表現法」は、いわゆる、修辞法に端を発する表現技術としての「表現法」ではなく、表現文型、表現形式としての「表現法」である。

『中国語表現法マニュアル』にある「表現法」は、この日本語教育の中で取り入れられている「表現形式」「表現文型」を中国語に応用したものである。これまでに出版された中国語の参考書にも、管見によれば、『気持ちを伝える中国語表現 1700⁸』や『中国語表現の基礎ポイント 88⁹』などのように、タイトルに「表現」という言葉を使用したものもあるが、これらは、『中国語表現法マニュアル』で用いた「表現」とは異なる意味合いで使われている。つまり、『中国語表現法マニュアル』で使われた「表現法」は、中国語の膨大な用例を、まずその機能や表現形式ごとに分類し、同一機能、話者側が意図する同一表現で使われる語彙を抽出することが作業の主体となっている。次に、分類した語彙ごとの形式やパターンを公式化し、公式ごとに代表的な用例と語彙をとりあげ、「表現文型」とし、これらに解説を加えている。「初・中級」と「中・上級」は、中国語のレベルによる分類であり、「初・中級」では、基本表現から中級レベルの表現形式を取り扱い、「中・上級」では、書面語も含む上級レベルの複雑な表現形式も取り扱うことを試みているが、『中国語表現マニュアル』は辞書ではないため、すべての表現形式を取り扱えたわけではない。しかし、初級から上級レベルまでを系統的にまとめあげ、中国語を「表現」という立場から整理、分類できたと考える。具体的構成については、次章において説明する。

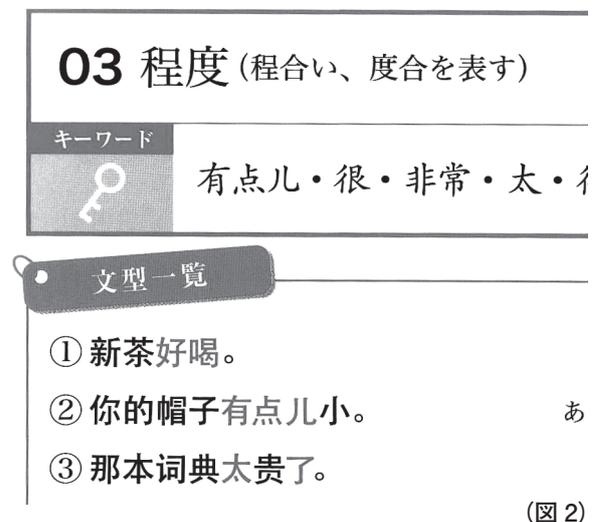
II 具体的構成と特徴

1. 『表現法マニュアル』（初・中級）の構成と特徴

全体の構成は、「判断」に始まり「取捨」へと分類した 61 表現と 13 の「コラム」、訳文一覧、「キーワード索引」、「索引」よりなる。各表現パターンは冒頭に「01」から「61」までの番号を基準に、表現上の分類を表す代表的な用語を示し、「キーワード」として、表現に使われるキーポイントとなる単語を示した(図 1)。「61 の分類配列は、表現の中から関連性の高いものをまとめ、8 群に分けて配列している¹⁰。



各表現内での「キーワード」は、表題に掲げた表現を表す上での重要なポイントとなる単語及び語句を示し、その後に、キーワードを使った具体的な文型を掲げ、番号を付した上で、「文型一覧」としてまとめている(図 2)。「文型一覧」で付した番号は、次の「用例と説明」に付す番号と一致する。「用例と説明」は、「文型一覧」と共通する番号の後に、キーワードを付して分類した。次に、キーワードの持つ意味や表現理解を促すための説明を「意味」の中で示した。更に、文型を文法用語に基づいて公式化した。「公式」の下に、その使い方がわかる数種の関連例文を各文型ごとに少



④ …(不)是…的

👉 意味：属性の判断と説明を表す。

👉 公式：主語 + “(不)是” + 名詞・形容詞・動詞など + “的”

1) 我的帽子是毛的。Wǒ de màozi shì máo de. 毛=(動物の)毛

2) 地球是圆的。Dìqiú shì yuán de. 圆=円、丸い

3) 她的毛衣是白色的, 不是黄色的。

Tā de máoyī shì báisè de, bú shì huángsè de. 毛衣=セーター

4) 包子是蒸的。Bāozi shì zhēng de. 包子=中華饅頭 蒸=蒸す

(図3)

なくとも3例以上取り入れ、ピンインを並列し、初中級レベルにとっては比較的難しいと考えられる単語については、単語の意味も付した(図3)。その他、各文型の性質上、必要に応じて、「注意」、「関連」「禁止」「対比」などを付け加えた。「注意」は、表現上間違いを起しやすき事柄や表現上注意喚起が必要な事柄

柄を記した(図4)。「関連」は、該当表現と関連する表現文型番号やコラム情報を記し、該当表現を

👉 対比：你跟我一起去吧。 一緒に行きましょう。
你和我一起去吧。 ほぼ同じ意味を表す
你同我一起去吧。 ほぼ同じ意味を表す
我不跟他学画画儿。 私は彼には絵を描くこと
他の誰かに学ぶ。
我跟他不学画画儿。 私は彼に絵を描くこと
彼に他のこと、例

(図4)

修得するために、関連して修得することが必要となる情報を記した。「禁止」は語句どおり、日本人が誤用しやすい禁止文型を記し、「○」は、例文が表現上問題なく使用できることを示すが、通常、何も付さない例文も使用可能であり、ここでは特に、比較するために正しい形であることを強調するものに付した。「×」は、例文が使用

不可能であることを示し、「◎」は、特に推奨に値する例文に対して付した。「△」は、例文が使用可能であるが、ある条件下においてのみ使用可能である場合に付した(図5)。

👉 注意：○我跟王老师学画画儿。 私は王先生について
×我和王老师学画画儿。

(図5)

「コラム」では、主に文法上の基礎知識に関連する内容をまとめた(図6)。「表現法」による中国語の系統化を試みているため、文法事項を細部にわたり解説することは避けた。ただし、表現パターンを理解するために必要となる文法知識がある場合、また文法知識が欠ける場合、表現パターンの修得に支障がきたす恐れがあるような文法知識については、「コラム」として別に取り上げまとめた。

よって、「コラム」は多くの表現パターンと関連しており、上記したが、そのような場合、「関連」の項目に、とりあげている表現が、どの「コラム」と関連性が高いかも記した。

上記したような構成を持つ『表現法マニュアル』(初・中級)は、参考書としての要素が高いが、

Column 文の構成 (1) 名詞述語文 形容詞述語文

動詞述語文以外、コラム「文の種類(29ページ)」の通り、 \color{red} 形容詞述語文が存在する。赤い部分は文の主幹部分、黒い音

(図6)

練習

07・08

① の選択肢から最も適当なものを選び空欄を埋め1度しか使えません。

A 多大 B 下雪 C 六点 D 变 E 越来越 F 去

(図7)

訳文一覧

01 判断

1. 私は医者で、妹は学生だ。
2. 彼女は丁麗さんだ。
3. 彼は有名な政治家だ。

1. 她是美丽的、年轻的

(図8)

使用方法によって、ドリルとしての要素を兼ね備える特徴を持つ。ドリルとして使用する際の助けとして、関連する2表現を基準に表現をマスターできたか否かを確認するための「練習」を用いた(図7)。また、「訳文一覧」「例文一覧」の活用により、日本語を見ながら、中国語作文をするなどの練習によって、学習した表現をより確実に定着することができるようにも工夫してある(図8)。また、駿河台出版社のインターネットサイト上に、本書内でとりあげた「例文一覧」と「訳文一覧」を並列して閲覧できるようにしており、中国語の基礎力、応用力を高めようとする学習者が、広く活用できるようにも配慮している。

2. 『続・表現法マニュアル』(中・上級)の構成と特徴

主となる構成は、『表現法マニュアル』(初・中級)を踏襲している。既に61に分類した表現パターンの「01判断」から「61取捨」までを踏襲し、更に新たに6表現パターンを加え67表現に分類した¹¹。この他に「コラム」、「キーワード索引」を付加している。初中級に比べ、中上級レベルは、その表現がはるかにレベルアップしており、その表現パターンは、慣用表現や文章語などにも及んでいる。よって、2冊を併用することで、初級レベルから上級レベルにまでの中国語表現を系統的に整理、修得することを可能としている。

先頭のキーワードは、各表現が初中級に対応している場合は、初中級で提示したキーワードも並列した。中上級の各表現に掲載したキーワードは、その後の表現パターンと深く関連するものだけに留め、学習者が各自のレベルに合わせて随時書き込める形を採用した。これは、中上級レベルの学習者には、学習者間に相当のレベル差があることが想定されるため、学習しながら、各自に最も適応した参考書を自分で作成することを可能とする意図がある(図9)。

39 依頼・要求・命令 (依頼する、要求する、命令する) 初中級 39	
マイ・キーワード	恳求、求、恳请、拜托、命令
	[初中級] 请、劳驾、可以吗、好吗

(図9)

B 当然、必然 (当然～だ、必ず～だ) 初中級 31 *	
マイ・キーワード	当然、自然、理所当然、必然、必定、一准、准定、无疑、无可争议、毋庸置疑、别说、尚且、何况
	[初中級] 肯定

* 『初中級31・推量』には「たぶん～だろう」「きっと～だ」の両方の意味が含まれるが、『中上級31・推測』では、「たぶん～だろう」を説明し、新たに「必然」を設け「きっと～だ」の表現を説明する。

(図10)

また、初中級において扱った表現パターンかどうか一目でわかるように、初中級の分類番号を踏襲し、中上級で新たに扱ったものは、アルファベット表示とともに初中級では扱っていないことを記した(図10)。

③ …沿(着)、順(着)

- 1) 沿公路有不少新开的饭馆。
- 2) 我们沿着青河调查野生动物的生息状态。
- 3) 小丁顺近路回到学校。
- 4) 顺着小河朝南走，过了桥，左边就是植物园。

1) Yán gōnglù yǒu bùshǎo xīnkāi de fànguǎn. 2) Wǒmen yǎshēng dòngwù de shēngxī zhuàngtài. 3) Xiǎo Dīng shùn Shùnzhe xiǎohé cháo nán zǒu, guòle qiáo, zuǒbiān jiù shì z

(図 11)

これは、本来中国語にピンインは併用されるものではないことを踏まえ、また、上級レベル者にとって、ピンインが既に参考資料としての役割が大きいことを考えて配慮した。

解説 「他動詞+数詞+量詞」で時間の長さを示す。特定の物との組み合わせで使われる量詞である。“頓”“通”“番”は本来2通りの意味を持つ。例えば、“頓”は批判や処罰などの回数を表す量詞であるが、“一”と組み合わせると「しばらく」「数分から長くても十数分くらいの長さ」という意味合いを表現する。“通”も“頓”同様、“一”と組み合わせると「一定の時間」を表す。“番”は比較的長い時間を必要とする時に使われる。“陣”は突発的に発生する状況下で使われる。これらの量詞の前では、“一”以外の数詞は、ほとんど使われない。

対比 一天吃三顿饭。(1日3度食事をする。) **回数**

妈妈打了孩子一顿。(母は子供をたたいた。) **短い時間**

関連 「17 回数・頻度」を参照。

初中級では、「文型一覧」を設け文型の図式化を試みたが、中上級では、用例が細分化、多様化しており、図式化や代表的な文型をあげることが、あまり意味が無いと考え、キーワードごとにグループ化し、用例とピンイン、解説を加えた。ピンインについては、用例ごとに付加する形ではなく、まとめて掲載する形を選択した(図 11)。

これは、本来中国語にピンインは併用される

用例の理解には「解説」「対比」「関連」「注意」などに種別し説明を加えた。「解説」は、すべての表現パターンに加えた。「解説」では、各表現パターンの用法、意味、一般的な注意点などをあげるとともに、各表現のイメージ、どのような場面で多用されるか否かについてなども記した。「対比」では、各用例のキーワードからなる

(図 12)

主な表現の用法や、表現内容の相違などを用例と共に対比する形で並列し、使い方からどのような相違が生まれるかを明示した。「関連」は、初中級及び中上級内の他のどの表現やコラムと関連しているかを明示することで、学習者がより効率的な表現修得ができるように考慮した。「注意」は、これまでの中国語指導の経験から、日本人学習者が間違い易い点について、学習者に注意を促すことを目的に記した(図 12、13)。

注意 顺着小河朝南走。OK 顺着公路有不少饭馆。ダメ
沿着小河朝南走。OK 沿着公路有不少饭馆。OK

(図 13)

「参考訳文」は、初中級では、すべての表現パターンの最後にまとめて列記したが、今回は各表現の終わりに位置づけた。これは、上級レベルでは、日本語と中国語が漢字を使う言語であるため、日本人学習者が意味上や用法上誤用している場合もあるため、随時確認できるように、各表現パターンに近い場所に設けたものであり、訳文についても、上級レベル者を鑑み、用法による直訳よりも自然な意識を心がけた。

「コラム」は前回同様、表現パターン修得に是非とも必要な文法事項をまとめる形で、今回は、「品詞分類の曖昧さと多重性」「心理動詞と心理形容詞」「形容詞の種類と変化」「副詞の種類」「否定詞・否定文」「方向補語」「結果補語と可能補語」について関連が深い表現パターンの近くにそれぞれの「コラム」を配置した。

Ⅲ 「表現法」の活用

『表現法マニュアル』及び『続・表現法マニュアル』の作成によって、「表現法」による中国語の系統化という新たな試みに挑戦したが、「表現法」という言葉は使われていなくても、「表現法」の手法を用いて中国語を解説しようとする試みは、今日に至るまで多くの場面で使われている。

例えば、中国大陸内で留学生向けに使われている中級レベルのテキストでは、本文の後に、「生詞（新出単語）」「組詞与詞語拡張（組語と語句拡張）」「詞語例釋（語句例釈）」「語法注釋（文法注釈）」という構成をとる場合が多い¹²。これらの中で表現パターンに関係するのは、「詞語例釋（語句例釈）」である。ここでは、本文中の重要表現をいくつかとりあげ、表現に結びつくキーワードに意味や用法上の解説を加え、それぞれにだいたい4パターン以上の例文を示している。つまり、キーワードごとに、表現パターンを取り上げるという手法を取り入れ、学習者への表現の定着をねらうものである。表現ごとに多数の用例を付しており、用例が豊富なことは、中国大陸内で留学生向けに出版される参考書やテキストの一つの特徴でもある。また、留学生用テキストに多用される「解釋句子中画線詞語的意思併造句（下線をひいた語句の意味を説明し、文を作りなさい）」は、本文中から誤用し易い表現をキーワードの形で抜き出し、各々の表現パターンを確認することで、学習者の表現への解釈を定着させ、更に短文作成から、表現パターンを定着させるねらいがある¹³。

また、『聴く中国語』や『中国語ジャーナル』など、日本国内で出版される自学自習用の月刊誌にも、「表現法」が活用されている。『聴く中国語』では、「文法と歓歡」が繰り広げる「日常会話をマスター」のコーナーで、場面を設定した二人の会話の後に、代表文型が示され、この文型に基づき「文法教室」や置き換え練習がなされ、「覚えて得する表現」では、会話のやり取りの中での重要表現の説明がなされる。例文も付される形で毎回6表現程度が取り上げられる¹⁴。『中国語ジャーナル』では、「THE VOICE OF CJ」の「聞き取りのツボ」と「フレーズチェック」がそれにあたる¹⁵。この他、高校や大学の講義の場で使用されるテキストにも、場面の後にフレーズを取り、その表現について解説するものも多い。

つまり、「表現」に関する中国語の解説は、「文法」と同じよう、本文や場面からキーワード、表現パターンという内容で抜き出し解説している。当然、本文からキーワードなどを抜き出す時には、編集者の意図に基づき、本文の配列やレベルが検討されているため、表現形式も配慮がされているが、これらは、文法事項同様、表現パターンだけを系統的に確認することは難しい。これらの問題解決を考えたものが2冊の『表現法マニュアル』ということになる。

おわりに

『表現法マニュアル』及び『続・表現法マニュアル』の出版により、中国語の表現パターンを系統的に分類する作業は、1つの到達点を迎えることができたが、表現法に基づく中国語の系統化の試みは、始まったばかりである。また、表現パターンを最終的に67に分類したが、その分類が適切且つ合理的であったか、また、表現法による系統化が学習者にどのような影響を及ぼすかなど、今後、様々な検証が必要となる。同時に参考書という性質上、かなり多くの表現パターンを取り上げたが、すべてを取り上げたわけではなく、特に慣用表現などについては、掲載していないものも多い。また、掲

載した表現についても、それらの表現が、レベル的に適切に取り上げられたかなども同様の検証が必要となる。

今後は、表現法の活用範囲を広めると同時に、課題として上記した点についての検証を重ねることによって、より多くの学習者が、短期間に、確実に中国語を修得できる環境を整えることが可能となる方向を目指す。

注釈

- 1 データベース的な辞書や語彙集を除くと、語彙の相違からまとめたものは年代順に『日本人の誤りやすい中国語表現 300 例』(呂才楨他 光生館 1986 年)『中国語類義語のニュアンス』(相原茂 東方書店 1995 年)『違いがわかる中国語の類語表現』(小川泰生他 白帝社 2003 年)などがある。
- 2 文法を中心にまとめた参考書は多数あり、その一部として年代順に『新編・東方中国語講座』(伊地智善継他 東方書店 1990 年)『中国語文法教室』(杉村博文 大修館 1994 年)『やさしくくわしい中国語文法の基礎』(守屋宏則 東方書店 1995 年)『中国語文法概論』(李臨定他 光生館 1996 年)『WHY? にこたえるはじめての中国語の文法書』(相原茂他 同学社 2000 年)『<完全マスター>中国語の文法』(瀬戸口律子 語研 2003 年)などがある。
- 3 近年、大学における中国語教育において、講義テキストとして中国大陸で出版されたテキストを使う大学が増えつつある。この背景には、大陸において出版されたテキストの質的、内容的変化、グローバル化による流通の簡素化などの多くの要因が考えられるが、その 1 つの要因として、日本における中国語教育に、母語日本語を媒介言語として仲介させずに外国語教育を試みる必要性への試みがあると考えられる。
- 4 富田隆行氏(『教授法マニュアル 70 例』 凡人社 1998 年 9 月 P. 1)によれば、直接法とは「場面と表現とを直接結びつけて、その言語を習得させようとする教授法」であり、間接法とは「場面と表現とを仲介言語を使って間接的に結びつけることによって、その言語を教えようとする教授法」であると説明している。
- 5 沖森卓也他『日本語表現法』(三省堂 2003 年 10 月 P.12)
- 6 森田良行『日本語表現文型』(アルク 1997 年 P.2)
- 7 窪田守弘『日本語表現』(晃学出版 1999 年 P.2) 同じような着眼点をもつものに、友松悦子、宮本淳、和栗雅子共著『どんなときどう使う日本語表現文型 200 初・中級』(アルク 2000 年 2 月)がある。
- 8 『気持ちを伝える中国語表現 1700』(実務教育出版 2000 年 1 月)は赤坂智子他の手によるもので会話表現をまとめた会話集としても意味合いが強い。
- 9 『中国語表現の基礎ポイント 88』(NHK 出版 2003 年 10 月)は上野恵司の手によるもので中国語の文法ポイントを 88 に分類しまとめたものである。
- 10 8 群の分類を以下に示す。第 1 群：表現 01 ～ 02、名詞述語文、関係動詞文、第 2 群：表現 03 ～ 06、形容詞述語文、比較文など、第 3 群：表現 07 ～ 21、行為動詞述語文、動詞の時間態、進行態、経験など、第 4 群：表現 22 ～ 34、心理様態動詞述語文、能願動詞など、第 5 群：表現 35 ～ 44、受身文、使役文など、第 6 群：表現 45 ～ 47、対象、空間など、第 7 群：表現 48 ～ 51、疑問詞疑問文、第 8 群：表現 52 ～ 61、複文、接続詞などとなる。

- 11 新たに加えた6表現は、それまでの「01」などの番号と区別し、A：概数、B：当然・必然、C：偶然、D：関連、E：話題、F：反問である。
- 12 北京大学出版社及び北京語言大学出版社が外国人留学生のために編集したテキストを中心にどのような構成をとるかを中心に検討し、ここでの例は、北京語言学院来華留学生二系編『中級漢語教程（下冊）』（北京語言学院出版社 1995年6月）によるものである。中級レベルを中心に検討を進めたのは、入門、初級レベルのテキストでは、留学生用ということから、発音、漢字の筆順や会話によるフレーズを中心とするものが多いためである。
- 13 張英・金舒年他編『中国伝統文化与現代生活』（北京大学出版社 2003年6月）参照。
- 14 『聴く中国語（漫画で学ぶ時間表現／中国激うま麵特集）』（日中通信社 2009年12月）
- 15 『中国語ジャーナル』（アルク 2009年11月）によるが、年間を通して、内容は異なるが構成は同じような形をとる。